

「まずは知る、そして行動する」

日本大学藤沢高等学校 2年 高塚 利咲

「夜、なにかお腹に入ったまま眠れると嬉しい。」

ある本に載っていたシリアの男の子の言葉。

この言葉を見た時、私は泣きそうになった。そして自分が毎日当たり前のようにご飯を食べられていることに罪悪感を覚えた。教科書に載っているゴミ山で暮らす子供の写真、寄付金を募るポスターに載っている栄養不足でやせ細った子供の写真。

「なぜ、生まれた場所が違うだけで世界にはこんなにも格差があるんだろう。」「子供は大人が守ってあげるべき存在ではないのだろうか。」

「可哀想」という気持ちよりも、「どうして」という強い疑問の気持ちが生まれた。

この思いがきっかけとなり、私は世界の貧困問題に対して何か行動を起こしたいと思うようになった。そこで始めたのが外国にルーツを持つ子供に学習支援をするというボランティアだ。外国にルーツを持つ子供の中には日本語がわからないために学校の授業についていけない、友達が出来ないなどの問題を抱えている子供が多くいる。私が担当した子はネパール国籍の中学一年生の女の子で、三年前に日本に来たという。日本語は話せるが、社会が苦手で、特に歴史の授業についていくことができないということだった。この子の力になりたいという思いから、実際に使っていたノートを用いたり、少しのことでも褒めるようにしたりと彼女が楽しく勉強できるように工夫した。

また、フードパントリーという活動にも参加した。フードパントリーとは生活困窮世帯など、様々な理由で日々の食品や日用品の入手が困難な方に、企業や団体などからの提供を受け、地域で無料で配布する活動のことである。この活動に参加するまで貧困は途上国の問題で、

日本にはあまり関係がないと思っていた。しかし、二時間という短い活動時間にも関わらず、約百四十人の様々な年齢層の方が訪れ、自分の身の周りにも支援を必要としている人がたくさんいることに気づいた。

そして今年の夏休み、バリ島の孤児院の子供と交流するというプログラムに参加した。本やネットからの知識だけではなく、自分の目で世界の子供の現状を見たいと思ったからだ。私が訪れた孤児院は小学生から高校生まで二十人程の子どもたちが暮らしていた。事前に現地コーディネーターの方から、子どもたちは皆、心に傷を持っていると説明を受けていた。しかし実際そんな様子は全く見せず、孤児院の子供たちは明るく笑顔が多いことが印象的であった。それと同時に、子どもたちの過去を思い胸が痛んだ。私は子どもたちにある質問をした。

「なにか私達にしてほしいことはある？」てっきり服がほしいとか、おもちゃがほしいとか、そういう答えを予想していた。自分の持っているお金で何か買ってあげたいと思ったのだ。しかし返って来た答えは

「来てくれるだけで、一緒に遊んでくれるだけですごく嬉しい。」というものだった。頭をガンと殴られたような衝撃だった。そうか、私は誤解していた。支援とはお金や物資を渡すだけではないのだ。

これらの経験からできた私の夢は、世界中の子供達が安心して明日を楽しみにできる世界を作ること。世界には貧しい環境に生まれたというだけで最初から選択肢がない子供もたくさんいる。私はたまたま恵まれた環境に生まれ、教育を受けることができた。だからそのチャンスを最大限生かしたい。そのためにまず私は、周りの人に自分の経験や思いを伝え、現状を知ってもらい、関心を持ってもらうことから始めていこうと思う。多くの人を巻き込んで、それぞれが自分にできることを一つずつやっていく。この連鎖が社会を大きく変える。そう信じて。